

# 博物館のダイバーシティ&インクルージョンの 充実化に向けて

～兵庫県立人と自然の博物館の事例～

兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 橋本 佳延  
主任研究員 山田 量崇  
主任研究員 藤井 俊夫  
研究員 福本 優

## 1. はじめに

兵庫県立人と自然博物館のこれまでのダイバーシティ&インクルージョン（以下、D&I）に相当する取り組みには、移動にかかるバリアの解消として2002年（開館10年目）よりアウトリーチ活動の充実化を進め、県内でも当館に来館することが容易でない遠方に住む方々に対して展示物の鑑賞機会や研究員のセミナーの受講機会を積極的に提供してきたことがある。また、2012年（開館20年目）からは、大人から子どもまで様々な世代が学べる機会を充実させるために、未就学児や親子連れが楽しめるコンテンツの提供に注力してきたことがある。

開館30周年を迎えた2022年10月には、2032年までの活動方針を示した「ひととはく将来ビジョン」を定め、D&Iの取り組みをさらに充実させることとしている。これを受けて2023年度には、館内に4名の研究員から構成されるD&Iタスクフォース（以下、D&ITF）を設置し体制を整えたが、まだまだ知見が不十分である。そこで今年度は、①ハード面でのユニバーサル対応、②特別な支援ニーズのある人々との直接的なコミュニケーション、③ソフト事業の多言語化、④職員の資質向上のための研修プログラムの構築の4つについて館内の取り組みの点検を行うとともに、博物館の利用に際して様々なバリアを感じている当事者や支援者と積極的にコミュニケーションする情報収集をはじめた。本発表ではこれらの取り組みの現状と課題について報告する。

## 2. ユニバーサルの観点による展示・設備の点検

### 1) 施設の点検方法

D&ITFメンバーおよび展示空間を担当する職員により、館内の設備について①物理的なアクセシビリティ、②情報へのアクセシビリティ、③特別な配慮ニーズを持つ人の視点

---

からチェックし、多様な立場の人にとってのバリアの有無、その状況について点検を行った。特に、①については車椅子利用者、ベビーカー利用者、視覚障害者の立場に、②については日本語を母語としない人々の立場、視覚障害者や視点の低い人々の立場に留意した。また③については、展示室内における必要な資源（水、静かな場所、点字、トイレなど）へのアクセスの観点を重視した。

## 2) 結果① - バリアの解消につながっている点

駅周辺から本館へ誘導するサイン類はシンプルな表現で視認性が高かった。トイレについては、本館（2～4階）および別棟に多目的トイレが設置され、車椅子利用者にも比較的利用しやすい環境であった。男女トイレともにベビーシートつきの個室やおむつ替え台が設置されるなど、乳幼児づれの来館者の利用しやすい環境が確保されていた。オストメイトトイレも施設で1ヶ所ではあるが設置されている。

このほか、救護室・授乳室の確保、盲導犬・介助犬同伴可の明示、英語・中国語・韓国語に対応した券売機の設置、入口受付における指さし案内板や筆談ボードの設置などによる発話の難しい方のバリア解消にかかる道具、等が確認された。

## 3) 結果② - 視覚に関するバリア

館の複数の入口に視覚障害者向けのビーコンや点字ブロックが設置されていた一方で、点字ブロックのない入口があること、展示室内に点字ブロックがないこと、点字がない解説パネルが大半であることなどのバリアが確認された。

また、音や触察を伴う展示はあるものの、大半は視覚を介して楽しむ・学ぶものが中心であって、視覚を介さず楽しめるコンテンツが不足していた。

視認性に関わる点では、展示室の一部で室内照明が暗く観覧しにくい場所があること、一部のパネルにおいて解説パネルの文字サイズや文字密度の不統一による見づらさ、過度な多色利用により色覚への配慮が不十分な点がある等のバリアが確認された。

## 4) 結果③ - 車椅子利用者にとってのバリア

構造的な問題として、段差のある非常口が存在すること、1階から2階をつなぐスロープの傾斜が急であること、エレベーターのかご室が狭く車椅子は1台しか乗車できず、かご室内で転回できないこと、利用できる高さのウォータークーラーがないこと、床にコンセント等の突出部品があること等のバリアが確認された。レファレンスルームでは、高所の図書がみえない・利用できない状況が確認された。

展示については、展示ケースのフレームなどの背後にある展示物やパネルの解説文が鑑賞できないことや、机に平置きされた配架物の存在が認識しにくいなどの課題が確認された。

#### 5) 結果④ - 情報へのアクセス阻害

展示や解説パネルの一部に幼児や車椅子利用者の視点の高さでは観覧できない・しにくいものがあった。漢字へのふりがななどの読みやすさへの配慮方法の不統一が散見された。これらの課題は開館当時からの古い展示で多くみられ、近年新設した展示物や企画展の展示物については改善されている場合が多かった。

#### 6) 結果⑤ - 日本語非母語話者にとってのバリア

展示解説パネルやサイン類、リーフレット等配布物について、その大半が日本語表記であり、多言語化対応が十分でなかった。解説パネルについての多言語化については比較的早期にスマートフォンアプリを使用して対応を図っていたものの、スマートフォンのOSの仕様変更により当初想定されていた動作が確保できなくなり、利用しにくいものとなっていた。

イベント、セミナーや動画コンテンツなどの提供は日本語で行っており、日本語話者以外の方が参加・受講・視聴しにくい状況となっていた。

#### 7) 点検結果の改善に向けて

点検結果は、後述するように館内でゼミを開催して、館内各課室に情報共有し、各課室に改善を図るよう順次働きかけている。展示什器やエレベーターなどの大型の設備に関する課題の解消には大規模修繕が必要であり、直ちに着手できない事情があるものの、サインや解説、イベント実施方法などのソフトの対応については、館員の研修と並行して順次着手して行く予定としている。

### 3. 特別支援学校の遠足への帯同で得た改善点

#### 1) 帯同の経緯

前項で示した展示・設備の点検作業を通じて、課題を改善する際には現状の設備・取り組みや改善方法の有用性の判断を適切に行うためには、当事者に意見を聞くことが不可欠であると再認識した。

そこで、当館の近隣にある特別支援学校（肢体四肢に重度の障害を持つ児童が多い）を訪問して授業の見学とヒアリングを行うとともに、当館への遠足に帯同することで、特別支援学校の児童が当館でどのように過ごし、展示を楽しみ、どこに利用に際してのバリアが存在するのかについて確認することとした。

#### 2) 遠足に影響を及ぼす館の構造

図1に示すように、当館の本館は4階建てで、周辺地形との関係から、一般入口は3階、バリアフリー入り口は4階にある。1階から3階が展示室、4階にはセミナー室や飲食可能

なサロン（他の場所では飲食できない）があり、各階の移動は1階から4階までのエレベーターと階段、1階から2階へ接続する大型スロープが利用できる構造である。エレベーターは館設立時に設置された油圧式のもので昇降速度が遅く、車椅子は1台しか乗車できない。多目的トイレは2階、3階、4階にある。

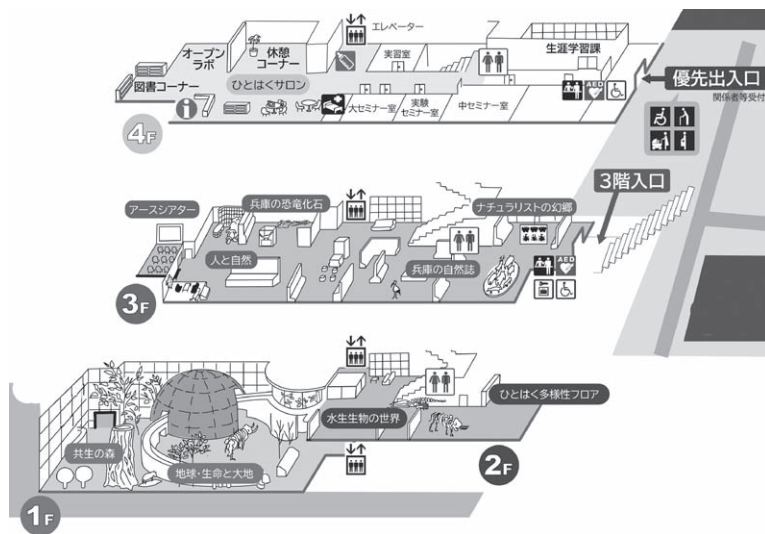


図1 当館の展示室の構造

特別支援学校の団体来館の際にはセミナー室の一室を控

え室として貸し出し、飲食や身支度、体調維持のための体操など、多目的に利用していただいている。

展示の多くは“見る”展示であり、ハンズオン展示やタッチパネル形式での展示はあるものの少ない。ただし、4階サロンには、担当スタッフに声をかけることで利用できる、“触れる”標本・教材をパッケージ化したミュージアムボックスが複数用意されている。

### 3) 遠足の様子

遠足は2023年10月に行われ、10時から12時までの2時間の行程で、特別支援学校小学部の児童7名と、支援教諭3名、各児童に付き添う担当教諭1名をあわせた計17名が参加した。当館からはD&I T Fメンバー2名が入館から退館まで帯同し、ヒアリングや観察により課題を収集した。

当日は、バリアフリー入口から入館し、控室とした4階のセミナールームで身支度を済ませたのち、4階サロンで遠足の説明を受け、その後児童2～3名からなる3班に分かれ、約1時間15分の自由見学を行う行程だった。

4階サロンのミュージアムボックスには、イノシシの頭骨標本や鳥の鳴き声図鑑など、触覚や聴覚を介して楽しめる標本・教材が多くある。しかし、付き添う教諭がそれらの存在や利用方法をすべて把握できているわけではない。当日は帯同する研究員が教諭らにミュージアムボックスの存在を紹介して、児童が利用できる機会を創出した。

展示室での自由見学では、水分補給や体温調節などのケアを適宜必要とする児童が、補水を必要とする場面が確認された。当館は原則として展示室内での飲食は禁止としているが、4階に戻って給水ケアを行うには時間的に難しい状況であったため、帯同する研究員の判断で、展示室内での給水ケアを行っていただいた。

このほか、児童に人気のスタンプラリーについて、スタンプが短い鎖で台に固定されてい

るがために、車椅子を利用する児童がスタンプを押せないなどの不具合が確認された。

#### 4) 明らかとなった課題とその解消に向けて

このように特別支援学校の遠足の帯同で、触覚や聴覚を介して楽しめるミュージアムボックスが用意されていても、その存在が支援教員に十分に周知されていないために利用につながっていないこと、その利用方法が分からないために児童の楽しみや学習に接続するかどうか判断しづらい状況が生じていること、車椅子利用者に使いづらいハンズオン展示が存在することが明らかとなった。

この課題の解消には、遠足の下見の段階で教諭にミュージアムボックスの存在を知らせ、利用方法についてもしっかりと伝達することが必要である。ミュージアムボックスの利用方法については、教諭に対する口頭による説明だけでなく、HP上で利用方法の説明動画の配信を行うことで、児童の事前学習にもつながる可能性がある。またハンズオン展示について、車椅子に座った状態で利用できる設えに変更する必要がある。

重度の障害を持つ児童にとっては、定期的な水分補給や体操（身体を横にして手足を屈伸させるなど）が体調の維持に不可欠であるのに、当館には各階に飲水したり体操したりすることができるスペースが用意されておらず、昇降速度の遅いエレベーターであるためにそのスペースへのアクセスが容易ではない。結果として、重度の障害を持つ児童は、ケアにかかる時間が増えてしまい、十分な観覧時間を確保できない実態があることが明らかとなった。

この課題の解消には、各階に水分補給が可能なスペースや体操が可能な部屋の設置だけでなく、体調の維持に適宜水分補給が必要な人に対しては展示室内での飲水を認めるなどの柔軟な対応を行う必要がある。標本や展示物の保全の兼ね合いも踏まえ、環境の整備とルール改訂の検討を始めている。

## 4. 日本語を母語としない方にとってのバリア解消に向けた取り組み

### 1) 当館活動における多言語対応の現状

日本語を母語としない方が博物館を快適に利用するには、多言語対応の改善・強化が必要である。博物館・美術館等の文化施設における多言語対応は「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン（観光庁 2014）」に端を発し、最近では「文化施設のための多言語対応ガイド（公益財団法人東京都歴史文化財団 2017）」など、これまでに多数の指針・施策や書籍が公表・刊行され、広く全国的に取り組まれている。

当館でも国籍を問わず誰もが利用しやすい施設・展示空間とするために、展示資料のパネルや案内サインの一部の多言語化のほか、展示室に設置したビーコンからの信号をスマートフォンが受信し展示物の情報を自動表示させるアプリを用いて多言語化の対応を行ってき

た。しかし、展示資料の解説パネルや案内サインの多言語対応は不十分で、外国人来館者にとって満足のゆくバリア解消となっていない状況にある。

## 2) 改善取り組み① - 海外研修生の視点からの改善提案

当館では、2023年10～11月の2か月間、海外インターンシップとしてフランスから2名の研修生を受け入れる機会を得たため、研修期間中に展示資料の解説パネルなどの英語翻訳の作成や、既存の英語コンテンツのわかりやすい表記への修正(図2)、外国人来館者の利用に関するレポートの作成に取り組んでもらった。レポートには、単に展示パネル(主にはタイトル)の英語翻訳だけでなく、外国人来館者の視点から展示室の動線の改善点や広報に関する意見が提案されており、現在はこれに基づき、順次多言語対応にあたっている。

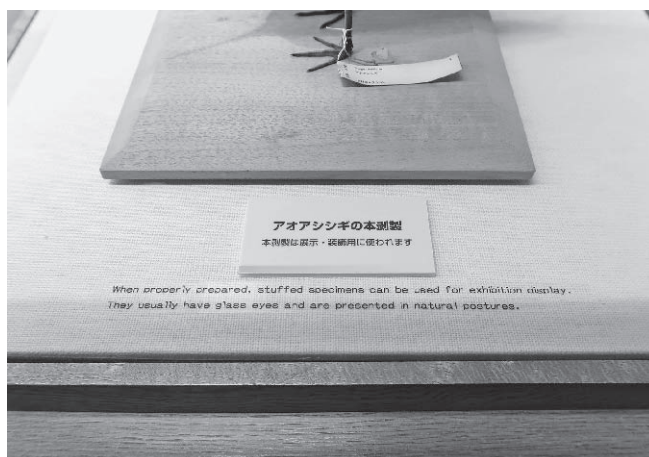


図2 英語表記を加えたキャプション

## 3) 改善取り組み② - 在留外国人の利用促進に向けた情報収集

普及教育やシンクタンクといったソフト事業においても、国籍を問わずあらゆる立場の方が利用しやすい、関わりやすいような取り組みをめざしている。しかしながら、当館には外国人利用者に関する諸情報が蓄積されておらず、当事者とのつながりもほとんどない。

そこで、まずは当事者に直接アプローチするための前段として、兵庫県の在留外国人や留学生の生活を支援している兵庫県国際交流協会(Hyogo International Association: 以下、H I A)にヒアリングを行った。H I Aは、多文化共生の社会づくりと県民主体の国際交流活動を促進するとともに、世界の人々とともに生きる国際性豊かな社会の創造に寄与することを目的として県の全額出資により設立された機関である。

ヒアリングの結果、外国人留学生に対してはカルチャーパス(県下の複数の文化施設を無料で利用できる)の配布や国際交流セミナーの開催などを行っていること、在留外国人に対しては日本語講座の実施や生活に関わる支援(生活相談、医療相談、婚姻に関することなど)を中心に取り組んでいること、文化交流に関しては食文化などを中心に実施していて自然分野までは行えていないことなどの状況を把握した。また、複数の在留外国人団体の活動についても情報提供いただいた。

国際交流に関しては、外国人国際交流員(豪州、中国、韓国、米国出身者)を雇用し、日本語による母国の文化について紹介する活動を展開しているほか、海外研修員を受け入れ、兵庫県内のさまざまな体験学習の機会を彼らに提供していることなどについて確認した。

このヒアリングが縁となり、2023年夏の海外研修員（パリ出身）に、当館で実施した外国人向けの英語セミナー（Natural History of Hyogo；兵庫の自然を英語で紹介するセミナー）へ参加していただいた（図3）。



図3 当館での英語セミナーの試行

H I Aへのヒアリングにより、当館で実現可能な国際交流の方向性として、兵庫県外国人国際交流員の協力による常設展示・セミナーの多言語化や、留学生が多く在籍する大学キャンパスで

のアウトリーチ展示の実施等、いくつかの着想を得るに至っている。今後はそれらを精査し、より具体的な行動につなげるための検討を進める予定である。

## 5. 職員の資質向上のための研修プログラムの構築

タスクフォース主催により、館内職員を対象にD & Iゼミを試行的に開催している（不定期、参加は任意）。内容は、第1回は、館員の自己研鑽に役立つD & Iに関する書籍・文献の紹介、第2回は館長による米国の公園におけるユニバーサル対応の歴史についての講義、第3回は上記2～4の項目で示したD & I T Fの活動の中間報告である。

このほか、館内メーリングリストを用いて、兵庫県博物館協会や全日本博物館学会などの外部団体が主催するD & Iに関連する講演・セミナーの開催情報や、障害者差別解消法をはじめとする各種法律に関する情報を館員に対して提供している。

今後はこれらの試行を踏まえ、系統立てた研修プログラムの構築を行うとともに、D & Iに関する館内指針やアジェンダの作成につなげていきたい。